



『寺有林、百年物の檜間伐』

集中コース(秋)開催報告

神社やお寺の所有する森林を総称して寺有林とい、そこで産出される木材は社寺の建造や宮繕に利用されてきました。明治の初めに社寺土地令により国有林として没収されたのですが、その後返還され現在に至っています。特に神社に付随する森は『鎮守の森』といわれ、お祭りなどの舞台として人々に親しまれ、宿る神様の怒りに触れはしないかと時に恐れられながら、大切に守られてきました。

伊勢神宮のいわゆる『神宮



受け口がぴったり決まればあとは楽



追い口は伐倒方向に真っ直ぐ



ロープの結び方ミニ講座



多目的ウィンチ「ひっぱりだこ」

年超るがノる超年を
かすきはるがノる超年を
心の中輪、しで驚とあキヒ

翌13日は窯出しの後、伊那市長谷の保科山林を見学する予定です。汚れてもよい格

の森』はもともと有名な社寺有林のひとつで、面積は5500haの広さを誇ります。1300年前から連続と続く、20年ごとの遷宮のために材木が切り出されてきました。それが底をつき始めたため、大正時代に200年先までの計画を立て、遷宮用の材を育ててきたそうです。平成25年に行われた第62回式年遷宮で、計画立案後、初めての間伐材利用ができたとのこと。

『明治神宮の森』は明治天皇が崩御された後、本多静六(山の手入れに関わる人たちのパイブルといわれている『森林家必携』の原著者)はじめ、多くの林学、造園学の学者によって100年先の極相林を想定し、設計されました。また実際の作業は、全国青年団の勤労奉仕で行われ、70haの木のない荒地だったところを造成し、各地から献木された10万本を超える樹木を植栽したという、まったくの人工林です。

王朝絵巻のきらびやかな行列で名高い京都三大祭のひとつ、葵祭の中継地点となっている下賀茂神社の社叢林、『紵の森』は、平安時代には500ha近い原生林だったそうですが、応仁の乱



使用後の手入れと目立て

や明治の土地令などで徐々に縮小し、返還後はわずか12haになったのですが、1994年に世界遺産に登録されたことがえのない森であることに変わりはありません。世界遺産といえ、平安時代に真言宗を広めた空海の高野山金剛峯寺。こちらの寺有林は2060haを誇り、一方天台宗最澄の比叡山延暦寺は1700haという規模だそうです。いずれのお寺も

びつしりと詰まっいて、天然ヒノキの様相です。百年を超えても直径が十センチしかないものもあり、込み合っいて、まだ手入れが必要でしょう。森林塾でもこんな林齢の林の間伐おそらく初めて、良い経験になりました。

集中コース(秋)

11月7日(金)〜9日(日)

参加者/石倉さん、岡田さん、都筑さん、平澤さん、堀内さん、松田さん

スタッフ/川島、早川

交流会には島崎先生も顔を出してくださいました。

次回以降の予定

専門コース第4回開催

11月28・29日(金・土)

今年度最後の専門コースです。現場は伊那市横山に変更します。8時20分、鳩吹集会所(旧・島崎山林研修所)集合。お弁当、飲み物、あればマイ・チェンソーなど。

炭焼き・保科山林見学

12月12・13日(金・土)

移動式炭化炉でヒノキの炭を焼いてみます。点火から窯止めまでは12〜16時間。鍋をつついて、一杯飲みながら火の番です。

通年コース第15・16回

12月12・13日(金・土)

寒さ対策も万全に

好で、マスク、軍手、など。標高1500mほどの保科山林は急峻なカラマツ林です。寒さ対策とともに、山登りのできる足回りでご参加ください。



7月31日から8月2日の3日間に亘り、KOA森林塾の集中コースに参加させていただきました。その節は、早川さんを始めインストラクターの小泉さん、川島さんには大変お世話になりました。また何かの縁で、同期になりました7名の受講生の皆さんと共に、有意義な3日間を過ごさせていただきました。改めてこの紙面を借りて皆様に感



小林 秀造

謝申し上げます。

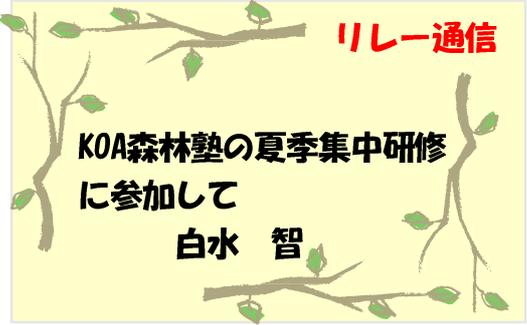
私は、生まれも育ちも山国信州です。5分も歩けば里山に踏み入れられるくらい近くに山があり、小さい頃には祖父や父に連れられて山林の手入れや、炭焼きなどに付いて行ったものです。また、小・中学校の暖房は、石炭ストーブでしたので、その石炭に火をつけるための『焚きつけ』(松の落ち葉を芯にして周りを細木で囲んだ、太巻き寿司状の物)を一人2束は提出するここになっていましたので、子供達は近くの里山に出かけ、松葉と少し太い枯れ枝を掻き集めては『焚きつけ』を作ったものでした。生徒の数も多かったこともあり、昔の里山は松葉が堆積している事は無かった様に思っています。さらに遊びといえは、探検と称してお弁当を持って山に行つて遊んだものです。箸など忘れても平気。小枝を2本、立派な箸の

と聞わらなくてはならない事が発生したのです。当地区では財産林を管理するための役が、ほぼ年齢順になりますが、回つて来ます。「山の事は何も分らないけれど、力だけは提供できる」そんな思いで引き受けました。言われるままに身体だけ動かし、1年。しかし山に入つてみると、なんと気持ちのいいところか、山で食べるおにぎりのなんと旨いことか。同じ山の景色も春と秋とは全く違い、折々の季節に見せる山の景色の素晴らしさ。そして空気の旨さ(山国に居ても)。春の山菜や秋の実りに舌づつみを打ち、夏の汗臭さと手や足の先が痛くなる程の冬の寒さには、少々閉口しましたが、「今ここに生きている」という何とも言えない感覚を感ずることができました。この様な経験は、自分の中に「退職後は山と関わつてもいいかな。」との思いを芽生えさせた時間だったように思

います。役員の方からKOA森林塾の紹介を受け、特別深く考えるでもなく、「行つてみるか。」位の軽い『ノリ』で申し込みをしたのです。集合して皆さんの自己紹介をお聞きするに及び、県外から多様な経歴を持った沢山の方々が参加されていることに、まず驚かされました。なんと一番山と無縁なのは私

だけではないかと、少々恥ずかしくもあり、これから三日間をどうしようかと、少々ブルーになつていて自分がいきました。 今回の森林塾は集中コースということで、ほんの3日間でしたが、私にとつては大変貴重な時間となり、生々の講義は、まさに信大における講義そのものであり、私がまさに信大生になつていようなものでした。残念ながら塾が終了してからは、山への関与はほとんど出来ていませんので、折角習つたチェーンソーの技術などは錆びついてしまつた感があります。 とここで今、私たちは同世代が中心となつて、先代より引き継いできている財産林のあり方を、改革しようとしていいます。昨年度は1年かけて規約改正を検討し、この4月の総会において承認を得ました。まさに改革の第一歩です。今年度は、『森林経営計画策定プロジェクト』を組織し、会合を重ねています。長野県では、戦後一斉に植えられた『人工林』の約8割が、間伐などの手入れが必要な時期を迎えていると言われています。そのため県民みんなが森林づくりを支える仕組みとして、平成20年度より県民

一人当たり500円の(通称)森林税」という税金を払つていきます(年間約6億円強の税収のようですが)。 我が地区でも祖父や父親の代に、子や孫が困らないようにと思いで植えた木々は、約50・60年を経過した今、財産としての価値には見向きもされない状況になつてしまいました。また、山作業に來ていただけの方も代が替わり、山に関する経験も少なく、どのような作業が危険なのかを予見し、自己防衛することさえ困難になつてきています。まして大勢で作業をしている中でチェーンソーを使った伐倒は、過去において事故もあり、雑木を切り倒す事くらいがせいぜい集団で出来る作業となつていいます。そのために間伐もままならず、積雪や台風による倒木も多く、土石流災害の危険度が高まっているのも現実です。この様な、山が荒れている状況を何とか打開したいといけないの思いで、今回のPJが発足しました。今までに6回会合を重ね、その中には地方事務所林務課の方々と、森林組合の方々にも会合に参加していただいたり、また他地区から講師としてお呼びし、その地区で実践されている取り組みを話していただく等、かなり本気で取り組んでいます。また、この夏、私は仲間二人とともに三日間の集中コースに参加させていただきました。それは楽しく有意義な三日間で、時間はあつという間に





過ぎ、頭から溢れるほどの知識や技術をお土産に帰ることができました。私たち同じ地域から参加した仲間が置かれた状況や活動の場のことについては、すでに前回(七号)の通信に榎武志さんが書いているとおりです。ここで、ここでは私自身の個人的なプラスアルファの参加動機について少し書いてみようと思います。

私は、日本の歴史、中でも海辺の村(海村)や山村の歴史について興味があり、調べてきました。これまでの教科書的な「常識」では、日本は米作りが大陸から伝わった弥生時代以来、瑞穂の国として人々の大半が稲作を主業とし、米を主食にしてきたと観念されてきました。けれども、日々の食事の中心を「主食」が占め、まさに人々の「主食」といえるほどになるのは、実は都市部では江戸時代から、全国的には近代以降のこと

と考え、よさそうです。田舎では、「ご飯」とはいつても雑穀や大根などを混ぜて増量したものが大半だったといえますし、今私の住んでいる神奈川県津久井地域などは第二次世界大戦後まで毎日の主食は「うどん」だったといえます。つまり三食コメだけの「ご飯」を食べるようになったのは、意外に新しいことなのです。コメを存分に食べられる「瑞穂の国」は理想ではあっても、必ずしも現実ではなかったといえます。

その一方、周囲すべてを海に囲まれて暖流・寒流が交錯し、豊かな漁場をもつこの列島が漁撈を古くからのなりのわいとしてこなかったはずはありませぬ。また国土の七割が山に覆われたこの列島で、木材はもとより野生動物や山菜をはじめとする森林資源を利用する生活が行われこなかったわけはありませぬ。それは縄文時代のみならず、稲作

が始まってからでも変わっていません。今でも世界に冠たる漁業国であり、全国どこでも道の駅などに行けば季節の山菜やキノコが並ぶ日本のあり方を

見れば、弥生時代以降の稲作普及にもかわらず、海の幸、山の幸を存分に活かす生活がこの列島では確かに続いてきたことがうなずけます。

山に閉じていけば、何よりも歴史上、日本の家という家は全て木材を使って建てられてきたことを忘れるわけにはいきませぬ。天皇・貴族の館でも、城郭でもそれは同様です。日本中の建造物の材料が山から伐り出されたのですから、林業は大いに盛んだったに違いありません。とくに破壊と建築ラッシュに明け暮れた戦国時代や、大都市の出現と大火による消失、再建の繰り返し返された江戸時代以降は、とりわけ林業は大規模に展開されたと考えられます。

ここ数十年、もっぱら山村の歴史を追いかける中で、山の一大産業たる林業についても大いに興味をもってきました。2005年には、山村のこと、山里のことを研究しているのに真つ平らな埼玉県の平野部に住んでいることに違和感を覚え、山里暮らしがしたいと、思い切つて神奈川県

の山里に転居しました(そのせいで通勤時間は片道三時間弱もかかるようになりましたが)。それ以後、小さな畑を作り始めたり、近隣の方々と米作りをしたり、仲間育てた大豆で醤油作りをしたりと、すっかり里山生活にハマってしまった妻と子ども田舎暮らしを楽しむようになりまし。

しかしままごと程度ではあつても、こうして自然を相手の作業をし始めると、作業一つ一つの意味、昔からの道具の利便さ、身のこなしのかたちなど、思いもかけないところで先人の知恵を実感することになりました。天候の変化に気が揉む農民の心境、水争いが起きてしまつて死にものぐるいの心境、手間をかけて収穫に至つたときの喜びなどが、心があり方でも推し量ることができるようになりました。

歴史の研究は、古文書など先人の残した史料を読むことが主たる作業になりませんが、実体験がまつたくな

いままに昔の古文書を読んでも、おそらくは理解しきれない部分が多々あるのではないかと思ひます。まして現代の歴史研究者の大半は農作、漁撈、林業などの経験のない者がほとんどでしょう。そういう者が史料を読み解き、どうしても理解しきれない部分、あるいは気づかずに読み過ごしてしまう部分があるのではないかと思ひます。ある種の現場感覚とでもいうようなものがなくては読み解けない史料もあるのではないのでしょうか。

さて、田畑のことについては少しずつわかり始めてきました。が、林業労働の現場のことについてはなかなか知る機会も体験する機会もありませんでした。しかし近隣のつながりの中で、榎さんたちが中心になって進んでいる「トランジション藤野森部」のグループに参加させていただけようになりまして。土日も原稿書きなどに追われて作業に参加できない日も多く、ほとんど幽霊部員のような存在でしたが、里山の森林整備に多少関わらる中で、木を伐つたり、利用したりする世界に少しずつ近づいてきました。そしてこの夏、榎さんから案内をいただいたのを機に、訳も分からな

いまま思い切つて参加してみたのがKOA森林塾の集中コースでした。

薪ストーブを焚いている関係で、チェーンソーを使つて木材の玉切りや薪割り程度はしていましたが、自分で立木を伐倒するなどはまったく初めての経験でした。しかし、今ではこの研修に参加して本当に得るものが多かったと思つていきます。測樹の仕方から始まり、作業計画の立て方、伐倒、搬出、チェーンソーの手入れなど、限られた時間の中ではありましたが、実に効率よく教えていた

だきました。

何より講師の皆さんの熱意と手取り足取りの懇切極まる指導は、本当にありがたいものでした。とくに個人的にはチェーンソーの刃研ぎを文字通り手取り足取り教えていただけたのは、本当に役に立ちました。伐倒作業の初日、研いだつた自分のチェーンソーを持っていきましたが、まるつきり切れず、それまでの自分は、単にヤスリで刃をなでているだけだったと気づかされました。詳細な作業手順やちょっとしたコツなど、本や伝聞では知り得ないことがらを根気よく教えていただいたのは本当にありがたかつたと思います。

研修内容は非常に濃く、とても三日間という短期間で身につけられるものではありませんでしたが、それでも自分の知識や技量がどのようなものか、さらに上を目指すとどういうレベルが待っているのかまで、ある程度全体像を掴むことができました。研修の最後に、参加者一人一人に「成績表」が渡されたのはびびくりしましたが、自分の技量の位置づけや課題が客観的にわかつて、非常に有効でした。

森林塾から戻つて以後、森部の現場で二回ほど木の伐倒・造材を経験する機会が

ありました。一本一本がすべて立地も木の状態も違うので、なかなか一筋縄ではいきませんが、それでもこれから場数を踏んで、少しずつでも作業に慣れていきたいと思っています。

10月には日帰りで労働安全衛生の特別教育を受講しに再び森林塾にうかがいました。みっちり八時間の座学でしたが、やはり一度現場での伐倒を経験していると、実に興味深く講義を聴くことができました。280頁ものテキストをひたすら解説していただくという地味な研修ですが、まったく飽きることはありませんでした。そこで得た知識をこれからも活かしていければと考えています。



”島さんの『森林・林業白書』を読む”

林業活動の近況

最新の白書(平成26年版)によると、林業は、木材等の生産活動を通じて、森林の有する多面的機能の発揮や山村地域の雇用の確保に寄与する産業であるが、我が国の林業は、木材価格の下落等により厳しい状況にあり、施業の集約化、路網の整備、人材の育成等による効率的かつ安定的な林業経営の確立が課題となっている。また特用林産物は林業産出額の約5割を占め、山村は林業の主要な担い手が生産と生活を営む場として、それぞれ重要な役割を担っている」と記されている。

しかし、度重ねて述べてきたように、これらの課題は第2次大戦後60年余にわたる未曾有の社会・経済変貌の課程で変遷を遂げてきた成果で、それぞれの課題を解きほぐしていくためには多くの努力が求められている。微細な記述



は白書に譲り、主要な統計値から林業の現状を読み取って見たい。

まず、付表1の林業関係基本指標によると、過去十数年の国内生産額470億500兆円に対して、林業はわずか1500億円前後(0.3%ほど)で推移しており、外材攻勢に伴う材価の低迷や農山村の衰退

されており、大幅な木材自給量の増大を図りうる物量的な素地は整いつつあると思われる。

平成23年に見直された「森林・林業基本計画」によると、平成32年の木材需要量を7800万立方メートルと見通した上で、国産材の供給量および利用量3900万立方メートル(木材自給率50%)を目指すこととしている。目標は極めて簡明であり、年々の蓄積成長量1億立方メートルをもつてすれば不可能な数値ではない。問題は「誰がどうするか」である。「誰が」については、森林の所有形態が国・公・私有林のいずれかを問わず、原

(林業就業者数は昭和30年の52万人から6~8万人に激減)等が原因として、我が国の木材自給率は長年に亘って20%台にとどまり、問題の解決を難しくしている。しかし、同表によると我が国の森林蓄積量はすでに50億立方メートルの大体を超えている段階にあり、年々の成長量も1億立方メートルに達していると推測

	(年)	1995	2000	2005	2009
国内総生産	兆円	495	503	504	471
うち林業	“			0.14	0.15
林業/総生産	%			0.03	0.03
就業者総数	万人	6457	6446	6356	6282
うち林業※	“	9	7	6	6
森林総蓄積	億m ³	35	35	40	44
木材需給量	万m ³	11190	9926	8586	6321
国内	“	2292	1802	1718	1759
自給率	%	20.5	18.2	20.0	27.8
住宅着工戸数	万戸	147	123	124	79
木造率	%	45.3	45.2	43.9	54.6

表一 林業関係基本指標

則としてその所有者あるいは経営者の責任において維持・管理されるべきと考えられるが、様々な理由で自営がかなわぬケースが増幅してきており、森林施業は主に地元森林組合や民間事業者が森林所有者等からの委託または立木購入によって造林や伐出等の作業を担っている。しかし、戦後の拡大造林地における膨大な間伐手後の解消や木材自給率の倍増を図っていくためには、激減してしまった現有労働力をもつてしては到底叶わぬ事柄ではなからうか。そのためには私の試算によると、少なくとも当面の5年ほどの間に年々2~3万人のブ

口級の優れた後継者の育成は欠かせないと思われる。こうした事柄については林野当局も重大な関心を寄せており、白書の各所に様々な対応が記述されているが、もっと早急に優れた後継者育成の具体化が強く求められる。森林・林業の不振を憂いて立ち上がった森林ボランティアやNPO・民間企業・林業女子会などによる森林の整備や保全活動は林業界にとってかけがえのない支援体制と位置づけたいが、不足をこれら各団体に委ね

ばといった安易な対応は厳に慎むべきではなからうか。業界の自主・自助努力の高揚に熱く期待したい。

島崎 洋路

おわりに

「編注 2005年より国有林が林産業より除外された」
渋柿をむいて軒端に干し、長芋や里芋をを掘り、白菜を収穫して少し浅漬けにし、沢庵を漬けて、乾いた大豆を莢からはずして三連休が終わりました。温暖化のせいでしょうか、今年霜の回数が少なく、野菜を漬けるのは何度か霜に当たってからになりそうです。そして、タイヤをスタッドレスに取り替えれば冬の準備は大方終わり、あとは大根や野沢菜が漬けあがるのを待つのみですが、困ったことに近年奥歯が2本抜け、さらに内科の医者に、「漬物は控えて」と釘を差されています。以前は漬物をどんぶり一杯食べてたのに、お前は心臓するほどこれらを愛しているのか、とついつい考えてしまつこの頃です。

投稿大歓迎。ご意見ご質問は事務局まで。

TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp
sh-sakano@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062(開催日)
URL http://www.koanet.co.jp

